

## 報告① 子どもの貧困対策としての保育

：ヘックマンとエスピン＝アンデルセンの視点から

山野良一

(名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科)

日本社会でもようやく子どもの貧困問題が注目されはじめている。子どもの貧困への注目は、子どもたちの家庭背景が平等ではないことへの社会的な認識を深めるだろう。そうした中、子どもの貧困対策として保育（ECEC）は理論的にも実証的にも欧米では脚光を浴びている。保育は、不平等な状況に置かれた子どもたちの発達格差に対する再分配施策として、公共性を持つものである。一方で、どのような保育のあり方（内容等も含め）が再分配を高めるかはまだ不明な部分を残し課題点でもある。こうしたことを考えるにあたって、ヘックマンたちの議論とエスピン＝アンデルセンの議論を整理しておくことは現時点では必要なのではないか。

ヘックマンたちの議論は、経済学の流れから出てきたものであり、またアメリカの保育の現状をベースに展開されていると言える。ヘックマンの議論の要点は、乳幼児期は理論的に人的資本への投資にふさわしい時期であり「幼児期に投資された1米ドルの投資効果は、後年になって投資された1米ドルの投資効果より高い」（ヘックマン等）ということである。ヘックマンたちが依拠する実証研究は、ペリープログラム、アベセダリアンプロジェクトなど貧困地域における小規模の質の高いプログラムを受けた子どもの将来にわたる効果を計測したものである。

他方、エスピン＝アンデルセンの議論は社会学や社会保障論の立場から、ヘックマンの議論をベースにしながらも、デンマークなど北欧の保育の現状をベースに展開してきたものである。エスピン＝アンデルセンが2012年に発表した論文では、デンマークとアメリカで保育を受けた子どもの追跡調査の中では、デンマークでは貧困な子どもとそうでない子どもの発達の格差を減らすことに成功していたが、アメリカでは長期的に見るとできていなかった。エスピン＝アンデルセンは、デンマークとアメリカでの違いをもたらした要因としてECECシステムの違い、特にアメリカにおける保育の質の格差にあるのではないかとしている。アメリカの場合、保育には質の違いが大きく、貧困な子どもは質の悪い施設に通っているのではないか。そのことが、貧困な子どもに効果をもたらさないことにつながっていたのではないかとする。

こうした研究からは、アベセダリアンプロジェクトなどが効果をもたらしたのは、アメリカの保育システムの課題があるからではないかという議論も出てくるだろう。また、保育が発達格差を解消するには、質のあり方が重要な議論になることを示唆しているだろう。質（や質の格差）に課題がある場合、発達の平等をもたらさない可能性がある。それは、ノイマンが主張するように、貧困な子どもほどの保育の質の悪さが影響するからだ。「質の悪いプログラムから最も悪影響を受けるのは不利な状況にある子どもたちだし、質の良いプログラムから最も効果を得られるのも彼らだ」。